

進行した結果に歸すべきこと云ふまでもない。前段に於いて論じた是等の遺跡の年時が當れるものとすれば、そこに自ら日本海岸に於ける砂丘移動の顯著さが推測出来るではなからうか。また遺跡の位置が何れも割合に海岸に近く、而も砂丘は今や遺跡を超へて内に擴がつてゐる状態などからすると、或は海岸線が同じく砂丘と

越 前 東 尋 坊

琵琶湖の東邊から、北東の方向である北陸街道を取り、越前では白鬼女川の谷となつて、遙かに加賀能登の邊までも伸びて居る、著しい構造線があるが、之は北陸では、海岸線と方向が概ね一致してある。此二者の間にある山部にも多數の小さい併行の谷があるし、又越知國^チ見高須などの死火山が南北に列んで在る。此南北構造線は各所で東西に近い、澤山の構造谷で切斷さ

共に内に進んだものではないかとの想像をも起さしめて来る。尤も海岸線の隆起、陥没と云ふ如きは地學上の大きな問題で吾々の輕々に論すべき所ではないが、如上砂丘上遺跡の示すところ或は右の點に接觸すべきものがあるやに見ゆる。試みに記して専門學者の調査を冀望する次第である。

比 企 忠

れるが、其内越前では足羽川谷と九頭龍川谷とで切られた部分に陥落地が生じた、之が福井平原である。此平原は僅に西北隅に於て海に開いてある。一體越前の海岸は山側峻峻で、急に海に臨んで居る所が多く、此狀況は北方山の盡る所即殆んど加賀越前の界近くまで續いて居る。此山の盡る所は福井平原の開く所であつてこゝに三國町があり又東尋坊がある。之より北は砂



越前三國東尋坊

丘地で出来てある

加賀の海岸である

のである

から、越前

海岸は總

て岩石で

出来、加

賀の海岸

は砂丘で

出来て居

るとも云

はれる。

此近邊に

湧出する

温泉に就

東より西南に向ふ方向に、併行の弱き所が有るものと見られぬ事はない。

福井平原は、一時海底であり、又近代までも、涿水したことは、地勢からも口碑からも明である、此水は今の三國町である西北隅より海に注いだ者だ、少くとも同港近傍は、有史時代に入つてからも尙ほ湖水であつた事は、次の資料に依つて明であつて比較的新しい事である。

一、三國と云事、當國中昔時漫々たる湖水にありしを、人皇二十七代繼體天皇未だ男大迹部味眞野皇子と申奉りし時、當國に坐て、詔在て激海と湖水との間を掘切べしとの旨に依て、則此湊の所を掘落すとひとしく、銚子の口より水をうつすが如くに、漲落るにより水戸口を銚子口といへり、されば天竺支那にも双ひ有まじき湊なればとて三國と號給ふとかや(繪圖記)

ても、越前の蘆原と加賀の片山津の兩鹽類泉を結ぶ一線、加賀山代粟津辰ノ口を連結する線も又北東の方向を指して居る。總て此近邊には北

北陸線金津より次の驛が蘆原溫泉場であり、次が三國町で海水浴場と風光明媚の東尋坊とを控へて居るから、此附近は越前の樂天地である。サテ安島岬は俗に東尋坊と云ふて、三國町の北端で米ヶ脇と安島村との間で、約一里許りの間日本海に突出して居る岬の名稱である。北端安島には小さき雄島と云ふ島と對して、越前にては沿岸中最も風光明媚の所である、しかも地盤が硬き岩で出來て居り、樹木繁茂することが出來ない、廣々とした野原になつて居る、之を千疊敷とか陣ヶ岡とか云ふて居る。岩石は輝石安山岩で皆柱狀節理をなして居り、海の岸にては極めて壯觀である。筑前芥屋大洞などに比すべき者であらうが、三國町築港に用ゆる爲め盛に破壊するから、年々種々に變形する。石柱は海面に直立し、大さ約一間、高く屹立する處は水面五六十尺に達する、之が少くとも二町四方に擴がつてあるから、多く林立する處は頗る景色が雄大である。其内所々に入江があつて池と稱して居るが、水は紺青色をなして、深さは測り知る

ことが出來ない、其内一番大なる者は大池と稱して居る、之が東尋坊なる傳説の遺つて居る舊蹟である。東尋坊潭記と云ふ者がある。

東尋坊潭在坂井郡安島浦左右岩壁旁出潮水通其中別匯作潭々深約五丈五尺峙高七丈餘門口廣八間互二十二間俯視下方則亂石縱橫出沒乎碧潮洶湧中底多鯪魚榮螺等蟹人善沒捕之昔時平泉寺有僧稱東尋坊爲人驕橫多力僧徒惡之一日僧徒相共觴飲于此東尋坊既醉踈崖而嘯傲有僧伺其昏冥即突起墮之東尋坊捷輒兩手提其僧與侍兒與身俱沒于潭忽暴雨震雷亦多死傷矣因名其所云每年四月五日平泉寺有法會則必暴風甚雨巨潮噴激聲震萬雷舟人相戒至是日亦不敢躋蓋謂其怨鬼發于此必過平泉寺云

雄島も亦柱狀節理をなした岩石であつて、之れが安島に續いてあつた者と見えて、昔時には干潮の時涉る事が出來たと云はれて居る、岩石は皆輝石安山岩で幾度にも噴出した者か、種類が異つて居る、東尋坊のは淡黃色を帶び、堅剛緻密である、之を檢鏡すれば磁鐵鑛の少い、普通

の輝石安山岩である、雄島の岩石は濃黒褐色を帯び顕微鏡下にては磁鐵礦の微晶が流紋狀をなして居つて他に何の礦石も見ることが出来ない即純玻璃質の者である之れが岩面に明に紋狀を現はして居ると、幅一寸許りの横に節理があつて容易に剝開することが出来る、之は流れたる證據であるが兩者とも同じ柱狀節理をなして居るから見れば、異つた組織を有する岩石は各異つた時に噴出した者でなく、一岩種の變種と見る方が適當かも知れない。

此近邊の海中の狀態は、或は淺瀬となり或は暗礁となりて水面近くに石柱の頭部を現す所もあり、或は深さの知れない深い所もあつて一様でない、又未だ海底測量が行はれて居ないから、不明ではあるが、海人の云ふ所では、東尋坊附近に、最も深い所があつて、時々地鳴を聞くことがあると云ふて居る、之は火孔であるや否やは知ることが出来ないし、地鳴も何の爲めか判明しないが、恐らく石の墜落する音であらう。越前海岸の輝石安山岩は、新舊があつて數

次に噴出して居る、凝灰岩層より早い者と、之を破つて噴出した者であるが、東尋坊及雄島の安山岩は何れに屬するか不明であるが、恐らく古き者と思はれる、何故なれば東尋坊と安島の間に平層をした凝灰岩層があつて、其内に雄島安山岩の破片や、人頭乃至豆大程の大きさの瀝青岩の塊が夾まつてある、之は淡黄色で眞珠光澤を持つた、薄く蒜狀に剝れる者である、其中心部には必ず純黒の黒曜石が存在して居ることが甚だ面白い事である、之れで此兩者の關係はよく判明するのである。此岩塊は形から見れば滴粒から出来た様に見えるから、海中火山の生産物でないかと思ふ、又先年佐賀縣より産出してラヂウムの原石として一時世人の注目を集めた瀝青岩と同一物である。之はまだ京阪地方に販賣して居る所がある。以上は越前海岸の短い記載である。